

第二部会

「女性神秘家」における理性と経験

村上 寛

修道誓願をたてず、俗人の身分で聖性を求めたベギン(Be-guine)と呼ばれる女性たちの思想が愛を中心としたものであることは確かだが、愛だけに注目しすぎることは、彼女たちの理性や知についての理解を誤ることに繋がるものである。そこで本発表ではベギンたちに見られる理性に対する否定的評価と愛の経験、愛による経験が持つ意味について確認した上で、ハデウエイヒ(Hadewijch)とマルグリット・ポレート(Mar-guerite Porete)という二人の特異な「ベギン」における理性理解とそれが意味するもの、そして彼女たちの理性の位置付けについて検討し、それぞれの特徴を浮かび上がらせるを試みたい。

ベギンたちが、理性的論証による神探求ではなく、愛によって、謙譲、謙遜、節制を軸とした生によってキリスト及び使徒たちを「まねぶ」ことで神を求めたことは、女性を取り巻く時代状況も相まってほとんど必然的なこととさえ言えるが、このようなまねびにおいて注目したいのは、それが身体及び感覚による経験と密接に結びついたものであるということである。そして理性ではなく愛と経験によって神が求められたことの最たる理由は、理性が愛との対比において限定的能力と捉えられたことによるが、ではハデウエイヒとポレートにおいて理性はど

のように位置づけられているのだろうか。

ハデウエイヒの場合、理性が愛と相互補完的な関係にある能力と見なされ、その価値及び有用性が積極的に認められている点に特徴があると言える。人間の能力である理性についてはまた、それが迷い、誤るものであることも指摘されているが、愛と相互補完的關係にある理想的な能力としての理性は、特に「照明された理性」(verlichte redene)と呼ばれ、区別されている。究極的な場面において人間は確かに神を知ることが出来ず、ただ神秘的な経験があるのだが、そのような状態へ向かう個々の場面においては、被造的事物間の関係によって理性を曇らされることなく、愛によって照らされた理性が、愛を教えながらただ神を求めることこそが求められているのである。

それに対してポレートにおける理性への評価は一見苛烈なまでに否定的である。擬人化された諸概念による対話形式をとる『単純な魂の鏡』では、理性もその登場人物の一員として登場するが、ある時点で死を宣告されてしまう。つまり理性は完成のために必要であるどころか、むしろ「死ぬこと」が必要とされるような、完成の障害の一つであり、理性に支配される生は、形骸化した社会的規範に従うだけの生と見なされているのである。

ポレートの理性理解におけるもう一つの重要な観点が、理性の「探すこと」という本質である。見出していないからこそ探すということが成立するのであって、神が理性によつては把握し難い対象である以上、探すことそれ自体が未熟な行為であり、探すことである理性が死ななければ秘められたことを理解

出来ないのである。そしてこのような理性には愛が対置される。理性は探し求め、愛は探すことなしに見出すのである。しかし理性の死は理性の放棄を意味しない。それは主従関係の逆転として理解される。理性に従うとは感覚経験に盲従して生きることであるが、愛が支配するようになった魂では、感覚認識能力としての理性が放棄されるわけではなく、感覚認識能力としての理性が純粹な奴隷として魂に従うようになるのである。

理性がこの世に関わる限定的能力であること、そして道徳的社会規範とでも呼ぶべきものであることは両者に共通する点であるが、ハデウエイヒが魂の完成の過程において理性と愛との相互補完的な関係を理想としているのに対して、ポレートが理性と魂の主従関係の逆転という独自のモチーフを展開している点に、両者の決定的な相違があると言える。

スピノザにおける無知としての奇跡

大野 岳史

スピノザは『神学・政治論』の中で迷信を批判する立場のもと新しい聖書解釈を提示しようとするのだが、この著作は神の啓示を批判する書と思われる。その理由の一つに「奇跡」についての見解がある。聖書解釈について論じる前に第六章「奇跡について」があり、スピノザは奇跡を迷信と考えていたと考えることができる。しかし『神学・政治論』の中では奇跡と迷信が結びつけられている箇所は一つもない。それではスピノザにとって奇跡とはいかなるものなのか。

迷信とは恐怖から生じるものであり、奇跡とはその出来事の

自然的原因を説明できない場合に「神の業」と呼ぶ習慣からくるものである。迷信のもとである恐怖から免れるために人間は奇跡に頼ってしまう。またスピノザによれば迷信は人間に自然と理性とを軽蔑することを教えるため、「自然と理性に矛盾すること」即ち自然を超えていることを奇跡と見做すのであれば、迷信が奇跡を生み出すと考えることもできる。

スピノザにおいて「奇跡」と「迷信」がともに関わる言葉に「無知」がある。オルデンブルク宛の書簡でスピノザは「奇跡即ちあらゆる悪の源泉である無知」(『書簡七三』)と言っており、また『神学・政治論』で奇跡を「その自然的原因を説明できないこと」としているため、奇跡は無知と同じことを意味していると思われる。ここで自然的原因とは実質的なものの存在や働きを決定する原因を指しており、目的因を念頭に置いているわけではない。むしろ『エチカ』第一部附録に見られる通り、自然的事物が目的因によって存在と働きが決定されるという考えは迷信である。すなわち目的因とは人間の空想したものという過ぎず、特にスピノザが目的因として挙げるのは「神の意志」である。しかしスピノザは「神の意志」を批判しているのではなく、自然的原因が分からないからといって同じく把握することができない神の意志に依存してしまうことに苦言を呈しているに過ぎない。だからこそここでの神の意志は「無知という避難場所」に他ならない。無知を基礎としても宗教を打ち立てることなどできず、むしろ信仰を迷信へと変えかねないからである。つまり無知は迷信のきっかけとなる。

無知が迷信を生み出すことについては、無知が恐怖をかき立